

プロローグ(1)

この世界、**拡張世界(アドベントラルワールド)**では、常に世界が拡張している。他の世界を巡り歩いた神様が、自分好みに作り出した世界らしい。だけど、この世界を作るにあたり、**下地となる世界が必要**だった。だから、古き神を力で追放した。

この世界は、つねに拡張する。新しい大地、新しい海、新しい空。すべてが冒険とロマンに満ち溢れている。

そこをヒト(人族、エルフ、獣人、魔人などの総称)が、**精霊が、魔物が、開拓**していく。

ロマンが、冒険が好き**な神様**だった。その神様は特に、人の感情が織り成す冒険譚が好きだった。だから自らの眷属として、**拡張世界を楽しんでもらおう**と考えた。

ゆえに**ビト**は愛される。愛ゆえに**加護**を与えられる。

加護を使い、冒険の果てに、**莫大な富や、栄誉、名声**、そして感動。そういったものを手に入れるのだ。

冒険という行為が、**本能的に刻まれている**。

常に拡張する大陸、未知の海域、そういった**所へのワープゲート**、いつのまにか出現する**ダンジョン**。

この世界において、**冒険者は永遠に無くならない職業**である。

無論、**モンスター**や**トラップ**、果ては**同族**により**酷い目**に、あるいは**死に至る出来事**に遭遇することもよく見受けられる。だが、それでも**ヒト**は**新しい何か**に挑む。

それが、**産み落とされた理由**として。

しかし、追放された古き神は、自らの世界を奪った神を許すことができなかった。追放され、世界の底へ封印され、絶望と狂気にとりつかれた古き神は、やがて復讐を決意する。

その一つが、この世界に生まれてくる生物を、自らの眷族とすることだった。生まれてくる子供を、生まれなかったことにして、自らの膝元である深層世界へと生まれさせる。

生まれ出る男の6割、女の4割が、妊娠が確定した瞬間に呪いにより煉獄に連れ去られ（なので妊娠した感触すらない）、古き神の眷属、煉族として生まれ出る。そしてヒトに害を成すのだ。

それは、新しき神と、その神の作り出した世界で、古き神を忘れて暮らす生物への、神罰である。

故に、生まれてくる古き神の眷属、通称煉族は、新しき神の生物を本能的に忌み嫌う。それは愛情の翻った憎悪に近いものだ。

煉族は多種多様な姿を持つ。生まれてくるはずだった姿をベースとしながら、それぞれ独自の進化を遂げる。

そして、なにより特徴的なのが、本能的に新しき神の世界の生物、特に新しき神がみずからの眷属としたヒトに対して非常に強い性欲・加虐性・残虐性を持つ。

自たちが手に入れるはずだった、その幸せを持つその生き物が許せないのだ。許されない。故に、ヒトの魂を正しき道へと戻さなければならぬ。

そう、それは神からの試練なのだ。

だから煉族は、新しき世界を常に襲う。

人を辱め、痛めつけ、絶望を与え、自らの遊び道具とし、苗床とし、壊す。それが煉族の本能レベルに刻まれた宿命だった。

そうすることで、新しき神に狂わされた、

かつての同胞たちを正しき古き神の身許へ送るのだ。

故に、煉族につかまったヒトの運命はほぼ決定している。



時折出現する煉族も。
新しき大地・領地を獲得しようとする国家も。
拡張する世界を切り開こうとする冒険者も。
さまざまな思惑を乗せて、この拡張世界は今日も拡張していく。

そして、これは一人の冒険者に起きた、悲しい結末。

冒険者「アリーシャ」
取り立てて特徴はないが、身軽さを利用した二撃離脱戦法を得意としている。
魔術も多少は使えるが、得意ではない。
常識人で、前向きにどう行動すべきかを考えて行動できるが、やや状況に
流されやすいところもある。精神力はあり、トレーニングも欠かさないが、
やや緊張しがちで本番に弱い。
ルーキーから脱し、中堅へさしかかろうとするくらいの実力はある。
可愛いものが好き。
現在はソロだが、将来的にはパーティーに入りたく思っている。



いつも通りの、通いなれたダンジョンの中の探索のはずだった。だが、ふと気になった壁を調べてみると、確かに感触が違ったのだ。

隠し部屋。その存在が頭に浮かぶ。壁を崩してみると、やはり部屋がある。アリーシャは慎重に気配を探り、その部屋に入った。果たして、中には宝箱があった。だが、それは罠だったのだ。

「えっ、ちよっ」

転移魔方陣だろう、トラップが発動して、見知らぬ部屋に飛ばされたのだ。見渡す限り、何も無いやや大きな部屋。それが飛ばされたところだった。部屋の中に、魔力反応もない。帰るための魔方陣などもない一方通行だ。だが、ただそれだけではないだろう。

部屋の中に、一つだけある扉から、気配がするのだ。

「っ……状況は、最悪、かな。」

アリーシャは一人愚痴り、ダガーを握りしめる。扉以外ないのだから、突破するしかないだろう。



「なんで、こんな触手が！」

部屋の中に飛び込んできた触手たちを、アリーシャは迎撃しつつ、
部屋の後方へと逃げこみ、体勢を立て直す。

扉からは、無数の触手が飛び出している。ぬめり、食事時にみたら食欲をなくす
ようなグロテスクな姿が扉いっぱいにひしめいているのだ。

「これは、どうしようね……」

二本のダガーを使い、群がる触手を払いのけるが、如何せん量が多い。
いずれ部屋の隅へ追いやられるのが目に見えている。

冷や汗をかきながら、アリーシャは現状を打破するための方法を
頭の中で描き出せずにいた。



「ぐわっ」

勢いよく飛び出して来た、触手の打撃がアリーシャの右肩を打ち据える。ダガーこそ手放さなかったものの、アリーシャが弱っていることは目に見えていた。

「ほんとうに、ついてないよ……」

度重なる触手の攻撃で、全身傷らただけだ。

魔力を纏わせた服も、攻撃に耐え切れずに敗れ去り、形の良い左乳房は露出してしまっている。

「……女の子失格だね……」

飛び込んでくる触手めがけて、右手のダガーを振るうが、当たり所が悪かったのだろうか、ダガーが根元から折れてしまった。

「いやだ、こんなところで、私はっ……！」

ダガーと共に心が折れかけるが、それでもなんとか奮い立たせ、アリーシャは絶望的な状況を脱出しようと試みていた。



「っ……はぁ……ぐっ……」

戦い始めてから何分、いや、何十分戦っただろうか。

すでに武器と呼べるものももうなく、服もずたずたにされて両乳首が見えてしまっている。

腹部は何度も殴打を食らい、紫痣が染みつき、各所からの流血も増えている。健康的な肢体に、ところどころにできた紫斑と出血痕は、どこか痛々しさと共に、淫靡な情景を醸し出している。

一向によくならない状況に、そして痛みに涙目になりながら、アリーシャは自らの終わりを自覚しつつあった。



その時だ。アリーシャの姿勢が崩れた時を狙って、5本の触手が飛び出してきた。回避する間もない。

「シューシューシュー」

痛みに、ついに叫んでしまった。瞳からは涙も出てくるほど敏感な場所、女性の急所、乳首に針が刺さっているのだ。

いや、正確には触手から生え出た針だ。

鋭くとがった針が、両肩と、右大腿、そして両乳首を狙ったかのように突き刺している。にじむ血と、激痛。

「ぐんぐん」

一瞬我を忘れ、触手を見つめ、ふと我に返り触手を引き抜こうと手を伸ばした。だが、アリーシャは閃光につつまれる。



「あ、あああああああああ！！」

突然、青い光が走ったと同時に、アリーシヤの体を衝撃が走り抜ける。
痛みと、体中を焼かれるような刺激だ。
動かす意思はないのに、体が踊り前後左右に痙攣を起す。

「っっっっっっっ！！！！」

一瞬で、乳首につきささった針の触手を抜くことができなくなった。
腕がコントロールできず、触手のぬめりもあってつかめない。
体が暴れるように踊り、何か焼けるにおいが鼻につく。



「あつ……おあつ……た……」

目の前がチカチカする。意識が白く飛び、やけに鼻につく、何かが焦げた匂いが、アリーシヤの意識を混濁させる。どのくらい苦しんだらうか。やがて青い光の代わりに、白い煙がたちこめた。ビクつく体が、刺激の残渣を感じさせる。

しかし、まだ針が抜けていないことに気付く。

「ぬか、なきゃ」

だが、思うように体が動かない。びくびく震えて、まるで生まれたての小鹿のようにプルプルするだけだ。



「はやう、にげなひと」

電撃のせいで筋肉がうまく働かないのか、ろれつが回らない。
だが、それで終わりではなかった。

「ぴきい」

カエルがつぶれたかのような悲鳴を上げて、アリーシヤの体がのけぞる。
陰部、それも布越しでも正確に陰核を貫いた触手が、電撃を放ったのだ。

「あ、い、いあ、いやあああああああ」



意識を失わずに済んだのは、よかったのか悪かったのか。
アリーシャは、立ち込める肉の焼けるにおいと、黒こげかけた自らの乳首と、
堰を切ったかのようにあふれ出た尿の匂いと、傷ついた皮膚の紫色も、
なにもかもがわからなくなって、涙を流す。

「あう、あ、あ……」

どうして、自分だけが。助けて、いやだ、これ以上痛くしないで。
ぐにぐにと様々な意識が混ざりあい、アリーシャを責め立てる。
意識がなくなりかけ、再度目の前が白くなる。



「あ……」
もはや言葉も出ない。与えられる刺激は、先ほどの比ではない。
クリトリスだけでなく、両乳首も、体に刺さった無数のとげもすべてから
電撃が放たれたのだ。

「あ……」
あまりの衝撃に、脳が、体が揺さぶられた。
そしてアリーシヤの意思は途切れた……かにみえた。



「……あつ……」

意識が、途切れたはずだった。
だが、再度の激痛で強制的に意識が浮上する。

「らめて、もお、やめ……あああああああああ」

獣のような鳴き声と共に、アリーシャの体がガクガク揺れる。
股間からは黄金水をみつともなく垂れ流し、唾液も、涙もすべてが自分で
制御できない。
それらの回らない言葉で、懇願しても、もはや止めるすべはない。



「っ……………!!」

再び電撃が止み、意識が落ちる。

「あっ……………」

だが、再度の電撃がそれを許さない。
地面に倒れ伏し、魚のようにピチピチと跳ねまわり、汁をまき散らす。
白煙が立ち込め、肉の焼けたような匂いと、濃厚な体液の香りが部屋中に
充滿している。

「あっ……………!!」

「んぐっ……………!!」

アリーシャが電撃地獄から解放されたのは、
意識が戻らなくなるほど弄ばれてからだった。

目覚めは、最悪だった。
四肢を固定され、囚人のように首と両手に木枷がはめられている。
衣服などない。全裸で、まるで存在を誇張するかのように股間が開かれた
姿勢となっている。

いつのまにつけられたのだろう、乳首や鼠径部に、液体がはいった管と、針、
おそらく点滴のようなものだろうが繋がれている。

「これは、いったい……」

そうだ、触手の群れに圧倒され、電撃を食らい続けたのは覚えている。

『やあ、はじめまして。こんにちは。』

ふと、どこからともなく声が聞こえた。

「なに？だれ？」

『私かい？私は、ただの煉族だよ。きみたちヒトの天敵の。』

どこか笑いを含んだように、声が答える。

もし、この声の通りに、この状況が煉族によるものなら、それこそ絶望的状况だ。

「っ……。その、煉族が、私に何か用でも……？」

気丈にふるまって見せるが、正直手足が震えてくる。

『簡単なことさ。トラップで死ぬところだった君に、選択肢をあげようと思ってね』

確かに、あの状況が続けばアリーシャは命を落としていただろう。だが、

選択肢を与えるとは、いったいどういうことだろう。疑問に思うアリーシャの前に
触手が器用に紙を持ってあらわれた。



「ペット」 「盾」 「花嫁」 「奴隷」
「共生」 「商売」 「魔力」 「子供」

それぞれには、単語としてそれが書かれている。

「これが、なに？」

『いったらう、君の未来だと。これは、これから先の、君の未来を表現した紙たちだよ。』

「っ……なんのまねなの！」

相手の顔が見えない。そのうえ意味の分からない選択を迫られている。体の中を巡る気持ち悪さに、思考が冷静になれない。



「そんなの、選ぶ、わけない……」

たとえ、拘束され、相手に自分の命運を握られている状況でも、自らの終わりを選ぶ。そう突きつけられた選択肢を選べるわけがない。だから、アリーシャは必然的にそう答える。

『ふふ、だろうね。だから、正直に選択できるよう、手伝ってあげるよ。即効性の媚薬さ。どんな聖女でも自慰したくなるほどに発情するね。そして、耐え切れなくなったら選ぶといい。そしたら一時的に拘束から解放してあげよう。』

ヒヤリと何か体がの中に流れる感覚があり、アリーシャにつながれた針と管から、媚薬が流し込まれる。

「……」

一瞬にして、針の刺入部から液体の通ったところが火照り、焦りが生まれる。アリーシャは、身動きすらできない状況で、されるがままだった。



あれから数時間は立っただろうか。時計がないからわからないが、汗が、体から滲み出す。肌は焼けつくように熱く、風が撫ぜるだけで、刺激が与えられる。

アリーシャは、それでも選択を選ばずにいた。手が自由なら、いますぐ自らの体をまさぐり、慰めたい。そんな思いに駆られる。だが、それでは本当の意味で自分が終わってしまう。そう、選べるはずがないのだ。

『やあ、強情だね。君が選びさえすれば、今すぐ拘束を解いて自由にしてあげられるのに。』

悪魔のささやきが聞こえる。選びさえすれば、この火照りをどうにかできると。



汗が、体を通り落ちるたびにその部分がしびれるような快感をアリーシャにあたる。

身じろぎしただけで、体が熱くて、痒くて、気持ちよくて仕方ない。

はやく、はやく乳首をこね回し、クリトリスをさすりあげて、膣を指でまさぐりたい。思考が定まらなくなってくる。

自分はなぜこのような状況になっているのだろうか。

『さあ、選べ。選べば楽に、楽になれるんだ』

楽しそうな声が聞こえる。そうだ、選べば楽になる。

こんなもどかしさから、解放されるんだ。いや、違う。選んだら終わりなんだ。そんな思いが、アリーシャの精神をさらに追い詰めていく



「っ、あ、……!!」

あれから何時間立っただろう。
全身を真っ赤にして汗を流し、うつろな瞳で涙を流す。
視界は定まらず、動けないもどかしさのみがアリーシヤを責める。
流れ落ちる汗が、愛液が、風が通るだけで刺激を与え、さらなる
刺激をアリーシヤに要求させる。

どうして、こんな風になったのだろう。自分はただ依頼をこなしていた
はずなのだ。いやちがう、それは昔の話だ。
今のこの状況、これは、自分が選ばないから解放されないのだ。
思考が、正常に働かない。



『さあ、そろそろ限界だろう？選ぶといい。そうしたらその枷を外し、君の両手を自由にさせてあげよう。』

甘い声が、ささやく。

最早、誰のせいでもうなっているのか、なぜこうなっているのかがわからなくなり、思考が狂いだす。自分が選択していないからだと認識してしまっている。

選ばなきゃいけないんだ。そうしたら、それだけで自由になれる。頼りない思考で、やがてその考えに行きつくのは時間の問題だった。

「え、らび、ます。だから、これ、はずして、おね……がい……」

そして、アリーシャは選択する。自らの終わりを。

BADEND

Select

「共生」



共生。聞こえはいいが、それは必ずしも両方の意思が必要とは限らない。
共生を選んだ彼女は、すでに人間ではなくなった。

スライムのプールに浮かび、常に愛撫を受けながら、与えられる快感に
酔いしれ、スライムのための苗床となった。
いや、スライムは確かに栄養や排せつ物の処理などをしてくれる。
そして、彼女にヒトでは味わえない快樂を与えてくれる。

アリーシャは、そのかわりにスライムの苗床になり、彼に体の支配を
すべてまかせる。子宮を提供し、スライムの子供を作り出す。
魔力を含む母乳はスライムの栄養になり、スライムをさらに肥大化させる。

共生だろう。そこにアリーシャの意思が存在しなければ。
だが、これは寄生と言ったほうが、良いかもしれない。

すでにアリーシャに思考能力はほぼない。与えられる快感に、
ただ身をゆだねるように、耳から侵入したスライムの触手が操作
しているからだ。だから彼女は幸せなのだ。



あつ、ちつのなかで、うごきだした。
これ、とつてもきもちいいんだ。
おっぱいからも、みるくをのんでくれる。ちゅーちゅーつて、とつても
きもちいいよ。

でもね、いちばんきもちいいのは、やっぱり、みみのなかをくちゅくちゅ
くちゅくちゅされるときかな。
こどもを、うむときも、とつてもきもちいの。

もつと、きもちよく、なりたいな。



さいきんね、わたしのからだに、すらいむさんが、すんでくれたの。
しばらくまえに、わたしのからだに、しにそうだったからかな。
なんか、しんぞうをすらいむさんが、うごかしてくれているらしいの。
きもちいね。

あつたかいし、きもちいいし、わたしはすらいむさんなしじゃあ、
いきていけないね。すらいむさんにまかせれば、わたしは、
しあわせ、なんだね。

そして、アリーシャの冒険は終わってしまった。

BADEND

Select

「商売」



商売。ほかの選択肢も、ろくでもない結果になるだろうことは予測できたが、この選択肢なら、最悪娼婦なりに落とされるだけで済むかもしれない。そう考えていた。アリーシャは想像できていなかったのだ。

アリーシャは、とある煉族の承認に売られた。そして、適性を認められて販売員になったのだ。だが、それはもちろん、普通の適正ではなかった。

アリーシャに行われたのは、まず、種付けだ。母乳がでるようにされた。そして母乳が出るうちに、特殊な薬品を投与され、乳房が人の頭よりも大きくなるまで肥大化された。そして、十分な量の母乳の生産ができるようになってから、牛の格好をさせられて、煉族の街で、ミルク販売員にさせられたのだ。



「あの、ミルク、ミルクは、いりませんか？」

煉族の町に、震えた声でアリーシャの声が響き渡る。
その姿は見る者の欲情をそそるものだった。

はりつめ、肥大化した乳房に、いきり立つ乳首。

柔らかそうな子を孕んだ丸いおなかに、頬を赤く染め涙目になった表情。

デコレーションのようにフリルのついた牛模様の服を着せられて、耳も
ヘアバンドで表現されている。

ポニーテールの髪は、結うことを許されず、かつてより長くなっている。



「ミルクを、買ってください。買っていただいた方には、私を犯してもよいとご主人様から言われておりますっ……」

悲惨さを含んだ懇願に、やっと二人の煉族が振り向く。

『犯すだって？そんな価値オマエにないだろうが。』

周囲に、嘲笑と、愉悦を含んだ笑いが広がる。

『そこを、どうか、お願いします。ミルクだけでも良いので、買ってください』

もはや、ここまでくると滑稽だ。煉族の二人は、さらに顔をゆがめた。

『ちがうだろうが。メス牛は、メス牛らしく、モーモー鳴いてから、どうかお願いします、私のだらしない乳を搾って、どうかミルクを出してくださいだろうが。』



「っ……。も、もー、もー。どうか、お願いします、私は、メス牛です。どうか、……だらしない、乳を搾って、ミルクをだして、ください」

悔しくて、涙を流し、体中を屈辱に震わせながら、言われたとおりに懇願する。その様は、もはや人間としての尊厳などないに等しい。

『それでやっと購入を考えてやってよくなったんだよ。なあ。ほんとに気が利かないメス牛だな。』

それでも浴びせられる怒声と嘲笑。
だが、アリーシャは泣きそうな顔ながらも、笑顔は崩さない。
……崩せない。



『その籠の中を見せてみるよ。』

煉族が、アリーシャの足元に下ろしていた籠を目ざとく見つけた。

「あっ……」

見られては、いけなかったのだ。その中には、アリーシャをただいたぶるだけの道具が入っているのだ。

『へえ、いいのあるじゃん。おもしろい。スカートをあげるよ。』

前もそうだった。こうなったら、もはや止められない。

スカートをめくりあげたアリーシャの膣に、いきなりパイプが突っ込まれる。

「んんんんん……」



「んっ……」

痛みに、表情をしかめるアリーシャだが、さらに苦難が襲い掛かる。
煉族が、新たにカウベルを取り出したのだ。

『よし、わかった。俺らが、売れるように手伝ってやるよ。』

そう残虐に笑うと、首輪と先ほど入れられたバイブに取り付けられる。
チリン、チリンと、バイブが振動するたびにベルが揺れる。

「んっ、くっっ、あっ」

バイブをくわえ込み、その上ベルの重さも加わり、アリーシャを責める。
だが、抜けたら、それこそもっとひどいことが待ち受けているだろう。



『お。マジックもあるじゃん。販売ってイラストとか大切じゃね?』

それだけ遊ばれても、まだ、終わらない。
今度は籠の中に入っていたマジックで、体の至る所に落書きをされる。

『そら、あそこの人に、さっきのセリフでミルク売ってこいや。しょうがないから
ご主人様に言われた金額でその体に書いといてやったからよ。』

「……はい。わかり、ました」

「モー、モー、どうか、お願いします。わ、わたしは、愚かなメス牛です。
このだらしない乳をしぼって、ミルクをだしてください。お代はわたしの、
体に書いてある、通りです。」



「あっ、あああっ、んんんっ」

ようやく、一人買ってもらえた。籠の中から便を取り出し、カいっばいに絞られた乳首から噴出するミルクを集める。

「痛っ、い、いえ、ちがいます。きもち、いいです」

あまりに強くしごかれるため、痛みを感じる。しかし、痛いという言葉に眉をしかめた購入してくれた人に恐怖し、必死に快感に変えるよう暗示をかける。

「あっ、んっ、ありがとう、「ごさいまし……た……」」

そして、これだけやって、ようやく一人にミルクが売れた。



『よし、俺らも宣伝してきてやるよ。』

先ほどから協力してくれた煉族の方たちが、遠くへ歩いていく。
その言葉通り、お客さんは次から次へときた。

乳首から直飲みする人、犯しつつ飲む人、様々だ。
他人の所有物だからこそひどく傷つけたり壊されたりはしないが、
乱暴に扱われる。

「モー、モー。はしたない、メス牛から、ミルクを搾っていただき、あり……
がとう、つぐ、ございます」

情けなくて、止まっただと思っていた涙が、出てくる。



あれから、2時間くらいはたっただろうか。

『よかったね、アリーシャちゃん。いっぱい搾って、犯してもらえて、体にメッセージもたくさんもらったね(笑)。ちゃんと牛さんらしくなれたね。』

そういって、最初からいた煉族二人が、笑う。

『はい……、ほんとう、に、ありがとう……！』

人間でもなく、メス牛でもなく、ただの商品で、彼らのおもちや。

それでも、アリーシャはうれしかった。

売れなかったら、それこそ乳牛から、食用にされてしまうのだから。

『はしたないメス牛の、ミルクを……どうか、また、ごひいきに……！』

そして、アリーシャの冒険は終わってしまった。